

Kesen¹ Inspired Poems of Arai Takako²

新井高子の詩とケセン語
—英訳 3 篇—

Rina Kikuchi³ and Jen Crawford⁴



5

¹ Kesen is a region in Iwate prefecture, Tohoku area in Japan. They have their own unique language (so-called dialect), Kesen-go (Kesen-language).

² This working paper is published as a part translation project, supported by Japanese Government Research Grant, Kakenhi: 15KK0049.

³ Associate professor at Shiga University, Japan. At present, she is a visiting fellow at ANU and the University of Canberra, and working with Canberra-based poets on an anthology of translations of poetry by contemporary Japanese women, as a part of Kakenhi research (15KK0049). Contact: kikuchi@biwako.shiga-u.ac.jp

⁴ Assistant Professor of Writing within the Centre for Creative and Cultural Research at the University of Canberra. She is the author of eight poetry books and chapbooks, including *Koel* (Cordite Books, 2016) and *Lichen Loves Stone* (Tinfish Press, 2016). Her critical work focuses on the poetics of place and on cross-cultural engagements in various literary contexts. Contact: Jennifer.Crawford@canberra.edu.au

⁵ The photo taken from *Catalogue: Oshirasama-dolls in Rikuzentakaka* (*Zuroku: Rikuzentakata no Oshirasama*, March 1990, published from Rikuzentakata City Museum).

CONTENTS

INTRODUCTION／はじめに

POEMS

A Lightbulb

電球

Dollogy

おーしらさま考

Mechanimism

機神考

TRANSLATORS' NOTES

SELECTED BIBLIOGRAPHY

INTRODUCTION

Japanese poet ARAI Takako (b. 1966) was born to a family who for generations owned a silk weaving factory in Kiryū city, Gunma Prefecture, on the outskirts of Tokyo. Takako studied the folklore and oral traditions of Japan at her graduate school, Keio University, Tokyo, and started publishing poems in the early 1990s. Since 1998, she has run a poetry magazine, *Mi'Te*, which features poems, translations and poetry criticism. Her second collection, *Tamashii Dansu (Soul Dance)* was published in 2007, and received the 41st Oguma Hideo Poetry Prize.

Her latest collection, *Betto to Shokki (Beds and Looms)*, published in 2013, explores the lives of female workers in the textile factory, applying a unique language inspired by the local dialect of Kiryū, which she used to hear spoken by the working class women in her childhood. The latter part of this collection is devoted to poems on the earthquake and tsunami disasters in the Tohoku area in March, 2011.

In late 2014, Takako started a poetry workshop in Ōfunato city, in the Iwate prefecture of Tohoku, which was severely damaged by the 3.11 disasters. Between 2014 and 2017, Arai held 10 workshops with locals of Ōfunato, including poets, in which they together translated 100 tanka poems by a renowned Iwate-born poet, Ishikawa Takuboku (1886-1912), into Kesen, a dialect of the Ōfunato region. In this work Takako's journey to explore the folklore of the Kesen language began. The three poems translated into English here are largely inspired by her experiences in the Kesen region and language.

“A light bulb” (“Denkyū”) was first published in *Mi'Te* No.132 (2015 Autumn); “Mechanimism” (“Hatakami kou”) in an anthology, *Contemporary Poetry Centenary* (Tokyo: Tolta, 2015); “Dollogy” (“Oshirasama kou”) in *Mi'Te* No.134 (2016 Spring).

Takako's poems in English translation are anthologized in *Four from Japan: Contemporary Poetry and Essays by Women* (Belladonna Books, 2006) and *Poems of Hiromi Itō, Toshiko Hirata & Takako Arai* (Vagabond Press, 2016). Her poems have been translated into many languages, including Chinese, French, Italian, Serbian and Turkish, and recited at International Poetry Festivals in countries such as America, Argentina, Italy and Turkey. Takako will perform her poetry at the Poetry on the Move Festival in Canberra in September 2017.

はじめに

本翻訳は、近現代女性詩研究の一環として、2016年12月に在外研究先のオーストラリア・キャンベラにて立ち上げた「詩人による詩の翻訳プロジェクト」の一部である。本プロジェクトは、詩を他言語に＜詩として＞移行する方法を探求することを目的とし、キャンベラとその周辺に住む英語詩人らの協力を得て、日本語詩を英語詩として移行することを試みたものである。

新井高子は、群馬県桐生市生まれの詩人。慶応大学文学部では東洋史を、大学院では民俗学を学び、埼玉大学国際交流センター准教授をもつとめる。

新井は、1990年代前半から詩作を発表。第二詩集『タマシイ・ダンス』（未知谷、2007年）で第41回小熊秀雄賞を受賞した。

新井の生家は、桐生の伝統産業である織物業を代々続けてきたが、絹産業の衰えとともに廃業した。第三詩集『ベットと織機』（未知谷、2013年）では、いわゆる「女工さん」に囲まれて育ったこども時代、消えゆく伝統へのまなざし、繁栄から没落への移行などを、工場をいきる女性たちの目と言葉を通して、あざやかによみがえらせた。『ベットと織機』の後半には、2011年の東日本大震災、津波、原発事故を受けた詩が収録された。

桐生の労働階級言葉に関心を持ち、独特の地方言葉を巧みにとり入れた『ベットと織機』、そして、震災と原発事故。これらふたつが経糸と緯糸になったように、その後の新井の詩の世界はひろがっていく。

震災後、2014年から10回にわたり、岩手県大船渡市を訪れ、詩のワークショップを開催してきた新井は、大船渡の言葉（いわゆるケセン語として知られているもの）に興味を持ち、ケセン語の口承伝説や表現を取り入れた、新たな詩世界を展開している。

方言詩には批判もある。特に、新井のように本人がその地方に生まれ育った者でない場合には、批判は強まるようだ。しかし、生まれ育った土地の言葉以外で表現することで、言語表現の枠を超えようとする文学的試みは、文学界には常に必要な新しい息吹である。世界を見渡せば、他言語表現から学び、それを取り入れること、これは文学界の常套手段である。シェークスピアは、読めないイタリア語詩の形式を真似、ロンドンで詩人として成功した。ノーベル文学賞受賞者のイエイツも、読めない日本語の能台本に魅了され、劇作品をいくつも書いた。ベケットは、母語の英語だけでなくフランス語でも作品を残した。

西脇順三郎の最初の詩集は、英語で書かれた。他言語で書くことで、詩に新しさが生まれ、詩が発展するのであれば、「詩」全体の財産として、喜ばしいことである。

本稿では、第三詩集以降の新井の詩作に注目し、大船渡の息吹がやどる「電球」と「おーしらさま考」、そして前作『ベットと織機』を彷彿させる織物工場にやどる神（らしきもの）を題材にした「機神考」を選び、詩人ジェン・クロフォード（Jen Crawford）と共訳した。

「電球」では、標準的な日本語を話す「女」と、ケセン語を基盤にした地方言葉を話す「男」の出会いがモチーフになっている。この「女」と「男」は、ひとりの女と男であるだけでなく、ひとつの言語そのものでもある。「標準語（女）」と「地方言語（男）」は出会い、絡み合い、そして、標準語をあやつる女は発狂してゆく。

言葉だけではない。過去と現在も交差し、交錯する。春をひさぐ女にもみえるこの「女」には、性行はもちろん、娼婦、乳がん、出産、石女、想像妊娠、さまざまなイメージが重なり交錯する。

この詩は、女と男のはげしいぶつかりあい、言葉（標準語）と言葉（地方語）のぶつかりあいともいえる。後半部分からスピード感がどんどんあがり、息もつかせぬ緊迫感が生まれている。この詩を音読すれば、緊迫感を体感していただけたらと思う。

後半では、女を組み敷いているであろう男の存在はほとんど完全に消えてしまっていると言ってもいい。そして、男に組み敷かれながら、女が男に命じる「電球点けろ」との叫びで、この詩は終わる。このようなはげしい言語のぶつかり合いが「日本語」というひとつの言語で生まれ得るほどに、日本語という言語が豊かであることを、この詩は証明している。

「おーしらさま考」も大船渡にまつわる題材を扱っている。新井自身の注にあるように、「おーしらさま」とは「オシラサマ」と呼ばれる東北地方に伝わる民間信仰の神体である。日本語話者の間でも、広く知られているとは思えないこの「おーしらさま」について、新井は、詩の最初で丁寧に描写している。つまり、「おーしらさま」とは、棒のようなもの（芯）に、毎年春に赤い絹布をかぶせた、まんまるに着ぶくれした人形なのである。

何年も繰り返されるこの絹布をかぶせる儀式により、下のほうの布は朽ちており、色も変色、布間には小さな虫たちが巣食い、異臭を放つ。これが、「守り神」といわれるご神体の現実だ。もちろん、新井は馬鹿にしているわけではない。この血と肉が混じった、くさった塊、これが村を、土地を守ってきた人身御供の娘たちだと、イメージを一枚の布に織る。

血と肉は、なにも人身供犠の娘たちのものだけではない。効果な絹糸へと轉身をとげるために煮られた何万の蚕。布さえも命あるものだったという広い視点がここにはある。さらに、女たちが流してきた経血。「おーしらさま」は魂だけでなく、血と肉が宿る神体なのだ。蚕を煮れば、息もできぬほど臭い、女の肉体は腐るし臭う、皮をはげば血がほとぼしる、という身も蓋もない現実。同時に、皮をはがれて魂となり、魂が皮を着て目に見える形を持つという、神話性。一見相反するように思えるイメージが、土地言葉によって、からめとられ、詩世界でひとつになってゆく。

わたしたちは、どれだけの犠牲の上に、今、立っているのだろう。大震災で、津波で、そして、原発事故で、被災した・被災しつづけるひとびとの血と肉を思わずにはいられない。人柱になった娘たちだけではない。わたしたちは、生きとし生けるものの犠牲の上に生きている現実を突きつけられる。

「機神考」では、犠牲のうえに生き続けるわたしたちの姿が、消耗しつづけるわたしたちとしてあらわれる。布を買って消費し、消費するわたしたちは、絹糸になった蚕の命を、絹糸を織りあげた女工らの人生を、消費しているという視点がここにある。獣の皮をかぶり労働者・生産者を喰らっているのは、わたしたちなのではないか。

「電球」(No. 132、2015年秋)と「おーしらさま考」(No.134、2016年春)は、新井が1998年から発行する詩と批評の雑誌『ミテ』から、「機神考」はアンソロジー詩集『現代詩100周年』(トルタ、2015年)から、著者の承諾を得て本稿に掲載するものである。

詩の翻訳にあたっては、日本語でどこまで原詩を理解できているかが要になるため、新井高子さんご本人に、何度もお電話で、そして、最後には横浜のご自宅にまでお邪魔して、ご教授いただきました。心より御礼申し上げます。

また、共訳にあたっては、新井さんと同年代、同姓、詩人で大学教員という肩書も同じとする、ニュージーランド出身のジェン・クロフォードさんと、半年かけて何度もミーティングを重ねながら、仕上げました。新井さんもクロフォードさんも、散文詩を好み、実験的な作風、方言やマイノリティ文化・言語に強い関心がある、という詩人としての共通点があったことも決め手になりました。

クロフォードさんは、日本語がまったくできません。原詩のニュアンス、何重にも重なるひとつの言葉のイメージ、そういったものが、なるべく訳詩にもいきるよう、説明を心掛けました。本プロジェクトの目標は、英語圏の読者のみなさんに、(英)詩として、日本語の詩世界を味わっていただくことです。詩の翻訳は、言語の移行、ひとつの言語を他

言語に置き換えることでは成り立ちません。それは一篇の詩が生み出す詩世界の移行であり、ひとつひとつの言葉が持つイメージの連鎖、音、リズム、行間や空白が生み出す音楽性や色、すべてが絡み合いながら織りなすひとつの詩世界を多言語で再生する行為だと、私は考えます。共訳にご協力いただきました新井さんとクロフォードさん、お二人の詩人に、心より御礼申し上げます。

2017年7月 キャンベラにて
菊地利奈

電球

だアらりと、お低頭バしながら咲いとっだよ、一重咲ぎの寒椿が、生垣のその一輪、しゃくくて見やれば、戸口から、年増女が口紅ひいて、「電球、お助けくださいませんか」。

ひよっと、合点しちまったアのす、土地ことばじゃねえもんで。上がりッ端サ脱ぐボロ靴、恥ずかしかったなや。「あのひとと同じ靴下」、妙に通ったその声が、こっちの背すじサ、ひやッと走って。軋んだっけえ、床板も。

馬鹿に高げえ杉天井。おらの背丈でも届かしねえ。指さされ、納戸の脚立バ探して戻りゃア、

立ってごぜんす、

おおどしま
大年増が

りんず ひいろ じゅばんすがだ
綸子の緋色の襦袢姿で。

障子越しの薄ッすら明がりに、うづ向いておりやした、伊達締めバ弄りくさって。脱ぎすてたメリンスの袂バ踏むのは、もう素足や（こりや、気狂げえだイ）。脚立バウッ捨り、踵を返えしたのはい言うまでもねえがす。

「もおし、なんにもいたしません。見ていただきたいだけなのです」、追いすがるその声が、オッ放してくれんがよ。かぼそい声尻、なお研いで、尖らして、真ッ赤な針バおらの耳根サ引ッ掛けで、ハア、ハア、ハア、ハア、荒がってぐ女の息が、煙り立ってぐその匂いが、胸苦しゅうで振り向かざるを得んのした。瞳が合うと、ひゅうッと澄んだよ、流れた化粧の下の素顔が。

鬼でも蛇でも来イヤがれエ。覚悟して、ツッ倒し、ヒッ裂ぎりゃア、着込んでおるがや、もう

一皮。「見ていただきたいだけなんです」、羽二重のその白襦袢が、内股よじって、裾バ直しゃ

る。経帷子にも見えだっけえ。まるで臨終し立てのごどく、額の皺がサッと退ぎ、お蠟のよう

に涼しい顔に、カッと灯った真深き瞳。おらは夢中で衿ヒッつかみ、開かず片胸、ざぐらッと。

ごせえませんのした、

ちちぶさ
乳房は。

み雪のように平らがで、一匹の五寸百足が、「手術して二十年です」。

*

A lightbulb

Withered while bowing, tsubaki— single bloom on the hedge. Scoop it up & there's— this old girl, lipsticked, watching from a doorway: "A lightbulb. Perhaps you could help?"

It startles me, her stranger's phrasing. Yes. Better go in, better shed these worn-out scuffs. "The same socks as him!" Her voice runs clear & cold down my back. The floor creaks—

Her ceiling's unbelievably high. Can't reach it— not me. She points, I go for the stepladder, come back,

& she's standing—
this old girl
in her bright red wrap

In dim light through paper screen I can see her looking down, touching her sash, her sleeves, standing on the kimono's fallen layers—feet bare already! Crazy! I drop the ladder, of course, & turn to go—

"Pardon me. I'm not going to do anything. I just want you to take a look." Her voice is pleading, catching me. Thin, thinner, sharpening, red, the whet barb hooking my ear's depth. *Ahh—ahh—* her breath pushes back, her scent's rising like smoke, my heart chokes, I turn— we turn to one another. Her make-up's slipping. I can see her naked face.

Ogres, snakes— I'll take what I can get. Pull it together, go to her. Push her down, tear open the wrap— what? Another underneath— silk, fine and white as a shroud. "I told you, I just want you to take a look." Her thighs are twisting, she's wrapping herself back up. Her face smooths, cool & waxy, her eyes flash a deep red. I grab the neck, pull at it, grab her breast—

it's not there
her breast

a handspan cut
smooth as mountain snow
& Scolopendra flat.
"The operation was twenty years ago."

*

手術して、二十年です。ハア、ハア、ハア、ハア、こうしてあなたに見下ろされ、胸の海が波立つと、吹き返してきますでしょう、ハア、ハア、ハア、ハア、赤々と、心の臓の真上の傷が。たったいま、生まれたように腫れ上がってきたでしょう。蠍ですよ、わたしの胸の。ハア、ハア、鉄だもの、この縫い目が。抉った深傷の針さきは、まるでお星座の尻尾でしょう。伸び上がらしてみましようか、こうして息を膨らして。ハア、ハア、ハア、ハア。

あの朝、椿が咲きました、病院の生垣に一輪だけ。

わたしは白い浴衣を着せられ、鼻すじがあなたによく似た医者でした。

麻酔が効いて、モヤのなかの迷子の耳にも、声は響いて「はじめます」、

恐くて、目の裏、こじ開けました、

カッと灯ったその電球、焼き付いたままなのです、わたしの奈落の水鏡に。

はやく点けてくださいまし、もういちど、

あなたはよく似た医者で、きょうも、わたしは白いきもので

咲いたでしょう、生垣だって

点けて、ほら、

掠ったよ、掠ったもの、あなたの鉄はひゃっこいねえ、

もっともっと波打って、見せますから、熱い赤アい鉄を、わたしは

ずっとずっと白いきもので、あなたはずっと医者さまで、

切ったでしょう、白い椿を、

散切りにしたでしょう、だから赤いきもので出たんじゃないか！

どうして点かないのさ！、電球だけが、

こじ開けたんだよ、毒針が、ヒッ搔いたんだよ、目蓋とあたしを、

ツッ刺して、オッ被さって、

カッと、灯しゃアいいだろう

麻酔のモヤって美味しいねえ、こんなにも涼しいもの、はち切れたって吸うんだ、あたしは、

どんどんどん膨れて膨れて、このお腹、気持ち悪りィかい？

the operation twenty years *ahh* like this you've looked down on me the sea of my
breast surging reviving *ahh* so red the scar that tips my heart reviving as if
new-born ridges swelling, yes? Scorpius of my breast *ahh* these stitches
the scissors
like the tail, yes? the needle-tip puncturing
and should I let this stretch *ahh* *ahh* with my deepest breath?
That morning a bloom single, on the hospital hedge.

I was put in a white gown. The doctor looked like you, with your strong nose.
The anaesthetic began to work
and through the haze to my lost ears
the voice echoed

Let's begin
frantic I prised open my inner lids
& the bulb's sting was printed
on the water mirror
my inner abyss

Quickly, turn it on again
you look like him today again
the hedge
and in a white gown
I bloom yes
Turn it on c'mon

you just brush past me with your scissors so chilly
and I'm surging surging showing hot red scissors
I forever and ever in a white gown
you forever the doctor

slashed them, didn't you? the white tsubaki
chopped them into pieces so I came in red!

Why doesn't it turn on!

the poisoned needle the single bulb
scratching me prising scratching at my eyelids
stabbing pushing me down stinging bright

Just turn it on!

so sweet, this anaesthetic haze.

so chilly

I'll puff puff till I burst
swell
and swell

my belly

gross, yes?
don't

つ
吊るっとくれよ、生垣いけがきに

あか しろ ひら はな
赤でも白でも開くんだから、花なんて

かぜ ふ でんきゅう
風に吹かれる電球だろ、あたしが、

はなちようちん よつゆ ほし
花提灯だよ、すっぱい夜露のお星さまだよ

ぬ いと は く しぼ
よじのぼって、この縫い糸を歯に喰い縛って、よじのぼって、

ちゅうづ ちゅう がんじがら サソリ はら オオサソリ
宙吊りで、宙ぶらりんで、雁字搦めのしたたる蠍が、腹ぼての大蠍が、

うつ
映るよ、

ひめかがみ
この姫鏡に

でんきゅう でんきゅう でんきゅうつ
電球、電球、電球点ける！

let me hang on the hedge.

Red or white, it doesn't matter.

it blooms anyway—

the flower

lightbulb swinging in the wind

I

pendant

star of the sour night dew

clambering, stitched thread clenching

clambering

hanging, dangling, Scorpius, bound up, springing droplets

swollen

scorpion belly

reflecting in this image, this compact

lightbulb, a lightbulb, a lightbulb

Turn it on

おーしらさま考

まっさか膨れでおらっしゃるなあ。ぎゅう、ぎゅっと、細帯締めで。
春ア来るたび、赤い衣ッコ欲しがら、着膨れ上がってしまわれたったア、鞆ッコみだいに肥えだったア、おーしらさまは。裾めぐりやア、臭うがや。煮染めだみだいに、ショボ垂れだ何枚も、何枚も。
肉だよ、そりやア。毎年毎年、新らし布ッコおっ被りやア、熟らすがや、中身のそれバ。ぎょうさん働だちや飼つとるだっぎやア。春サ来で、蠢めえとるぎやア、ほろほろほろほろ。
なアに、蚕の唾汁だもの、肉汁だアもの、臭うがよ、絹糸は。製糸工場サ行つたこだアねえのすか。鼻ッぽ火ィ付ぐどお、繭玉は、皮だもの、生皮だアもの。湿気で腐りやア、還えるンベえや、肉塊サ。

おーしらさまは、木乃伊でおらっしゃるがあ、お蚕の、
おーしらさまは、木乃伊でおらっしゃるがあ、娘ッコの。

昔なア、おつたづなア、おーしらさまの心棒みだいな娘ッこが。ダゲン、ダゲン、木割で両腕ブツ斬らい、立とつたア。人柱アさね。人の柱バお手向げするづよ、山神に。お返しだアもの、ぎょうさんの木柱の。
立とつたア、あの娘やア、止まんにやアもの、肩の血が。月の血が。ぎゅう、ぎゅっと、杵サ縛らい、飛沫ィだっぎやア、胎がらも。
止まんねにやア、息サ絶ィでも、
ヒン剥がィでも、山神に、生皮バ。

おーしらさまは、身代アリどお、あんだアの、
おーしらさまは、身代アリどお、山神さアまの。

春ア来るたび、若げえ皮ッコ欲しがら、膨れ上がってしまわれたったア、孕レンみだいに肥えだったア、山神さアまは。祝つたなア、息んだなア。新らし花ッコ、山陰がら何本も、何本も。

何百も、何千も、

年バ重ねで、

Dology

Oh! You're even rounder than I expected. Cinched in by a skinny belt.

Every spring you need a new red dress, so now you're fat with layers, a bundled-up ball. Girl-doll. What a stink when your hem's picked up—as if those layers were stewed in soy for days. Layers, layers fraying, then more layers.

Fresh layers every year. You put on new ones as the ones inside mature. And there inside you tend your many moulds. In spring they wriggle, teem, and like blossoms fall away.

Well, it all makes sense—the silk threads are both the spit of the worms and their boiled-up flesh, so of course they stink. You've been to the silk mill, right? The stench burns your nostrils because the cocoons are peeled skin. And so these layers, rotten with damp, turn back to flesh.

Of course. Girl-dolls are the mummies of silk worms.

Of course. Girl-dolls are the mummies of young girls.

Once there was a girl like a girl-doll pole—whack, whack!—standing, with arms chopped off. Human sacrifice, yes? The human pole offered to the mountain goddess. We give thanks for all the wood that we're given, of course!

Standing, she can't stop the flow of blood from her shoulders. Moon-blood. She's cinched to the pole and it splashes, even from her womb.

And can't stop, even after her last breath is gone,
even after the goddess has stripped her skin.

Girl-doll is standing in for you.

Girl-doll is standing in for the mountain goddess.

Every spring you need new skin, so now you're plump with life. Goddess. Celebrating the breath-push. Blossoms, then more blossoms from within your mountain gorge.

For hundreds of years, thousands of years

layering age—

拵せえでけろ、おらアの遺骸^{むぐろ}お。ゆっぐら、ゆっぐら、着^きしでけろ、お蚕^{しら}の肌^{はだ}コお。
赤^{あか}いの、けらい。
染^しみっちまアもの、止^とまん^{すそ}にヤアもの。裾^{すそ}めぐりヤア、臭^{にお}うべや。

つぎ
月だよ、
そりヤア。

* オシラサマは、主に東北地方に伝わる民間信仰の神体。家に祀られる。オッシャサマ、オコナイサマ等の呼称もある。養蚕の神、農神、家の守り神、仏様等、さまざまな性格を持ち、定説はない。二体一対のほか、一体、多体の祀り方もある。「けらい」＝頂戴。

*Please, please make a corpse for me, slowly, slowly put the skins on
give me red ones
because I'll dye them, because I can't stop. Of course it stinks when you lift these layers.*

*That's
the moon.*

機神考

ぎゅんぎゅんぎゅんぎゅん、駆けずっておりました
機屋のまわりを
神さまが、
素ッ裸の神さまが、犬歯を垂らし、

布を織る
あるいは買う、
わたしたちは生産する、消費する、消耗する
いいえ、
もっと根源で
消えたもの、
消されたもの
裸ンぼうで歩くのを止めただろう、わたしたちは
獣の皮を纏って
その頭を祀るのも、歌って踊るのも、
繊維の
うぶ毛の根ッコは
臭う、
葬られたものたちの息

ぎゅんぎゅんぎゅんぎゅん、駆けずっておりました
機屋のまわりを
四つ足で、
毛むくじゃらで、むんむん曲がった鼻づらが、

喰らっちまったがですよ
べろらッと、
織り子らを
糸を吐きだす女らを、

「おもてへ出ろイ！」

Mechanimism

crankrankrankrankrank
around the silk mill runs
a god,
stark naked, canines looming—

whether we weave the material
or buy it
we produce, consume, expend—
no—
there's something deeper:
what's vanished,
 what was made to vanish—
we stopped walking naked, yes?
put on the animal's skin
& sang, danced, worshipped its severed head,
the material woven,
the roots of the downy hair
reeking
with the breath of what's buried—

crankrankrankrankrank
around the silk mill
on four legs,
furry, sticky, horny-nosed,

it gobbles up
gulp!
the mill women
who spit the thread—

get out of here!

Translators' Notes

“A Lightbulb”

Tsubaki: *Tsubaki* is a single-layered winter camellia, usually deep red or pure white. The flower is associated with traveling courtesans, who carried it both as a medicinal remedy and to indicate their profession. There is also an association with *La Traviata*, the title of which is translated, in Japanese, as ‘The Camellia Princess’.

“Dollogy”

Girl-doll: The Japanese word used here is *Oshirasama*, the name of a doll or idol made by layering pieces of silk over a stick as part of a Tohoku regional village ritual. Girls and women add fabric to the figure annually in tribute to the goddess manifest in the dolls. In some parts of Japan *Oshirasama* appears as the female half of a male-female pair of dolls, or as one of a set of several dolls.

SELECTED BIBLIOGRAPHY

An Anthology: Contemporary Poetry Centenary [現代詩 100 周年] (Tokyo: Tolta, 2015).

Arai, Takako. “Essay on ‘exciting words’ IV: Disaster poetry by Ōfunato poets” [「わくわくな言葉たち」だより(4) ——大船渡の詩人による震災詩]

<http://www.mi-te-press.net/essay/bn1610.html> (July 2017)

first published in *Mi' Te*, No. 134 (2016 Spring issue)

_____. “Disaster Poetry from Ōfunato”, trans. by Jeffrey Angles. *Japan Focus*, 15 January 2017 (Vol 15, Issue 1, Number 5)

<http://apjff.org/2017/02/Arai.html> (July 2017)

Mi' Te, No. 132 (2015 Autumn issue)

Mi' Te, No. 134 (2016 Spring issue)